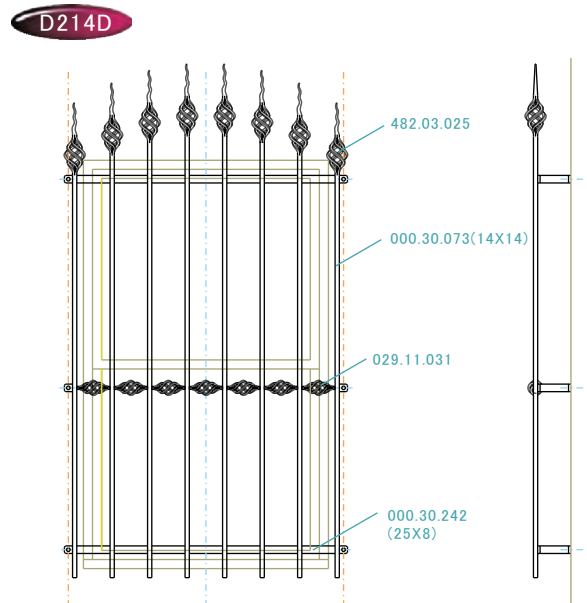
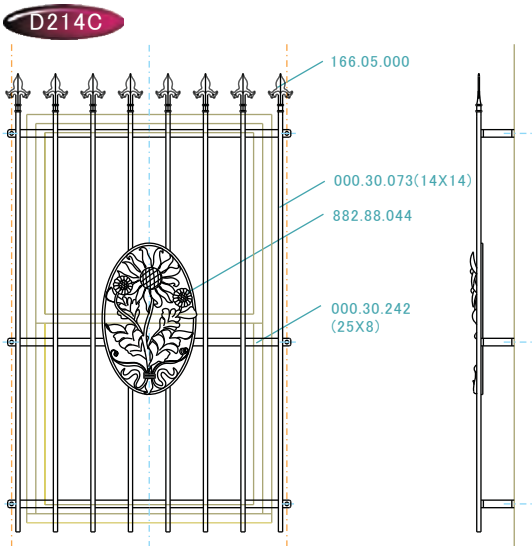
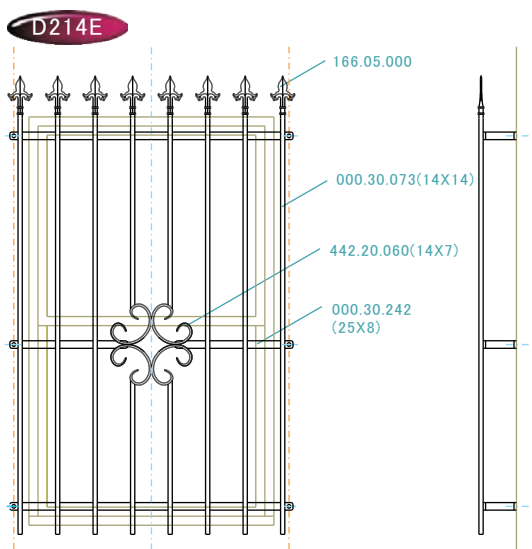


図D214A,B,Cは、縦
棧あるいは横棧の一部
を欠取り、唐草パネル
を組込むデザインの方
法です。格子の表面に
貼り付ける方式ですと
背後の棧も見えてしま
いますが、このような組
み方で唐草パネルの形
が鮮明に解かるよう
になるメリットがあり
ます。
注意したいのは、唐
草パネルの奥行がたて
子の奥行より小さくなら
ないようにすることです。



図D214Dでは、中棧をバスケットの連続に変えましたの
で、それに伴い剣先もバスケット形に変更しました。



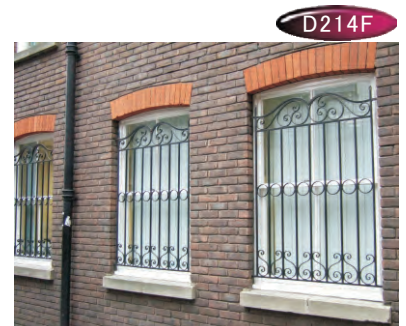
図D214Eは単体の唐草パネルではなく、4個のC唐草の組
合せでパネル状に見せています。好みの唐草パネルが
見つからない場合などに利用すると便利なデザイン技
法です。



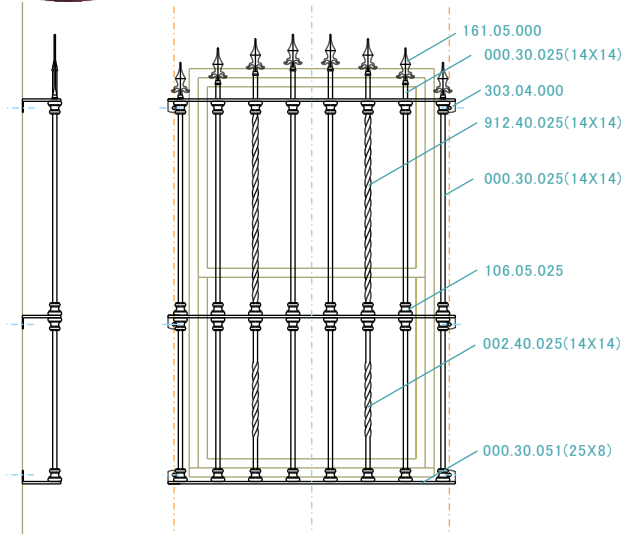
壁が厚く、窓が奥に引っ込んでい
る場合は、写真D214Fのように壁
開口部のサイドをねらって窓格子
を取付ける例をよく見ます。

煉瓦積みの建物の場合、格子の取
付アームの高さまで積上げたところ
でもう窓格子をセットして下側の
アームを目地で吞込んでしまい、さ
らに上のアーム位置まで積上げて
アームを吞込むという方法なので、
ベースプレートもジョイントも煉瓦
の切欠きも無いスッキリとした取
付部となります。

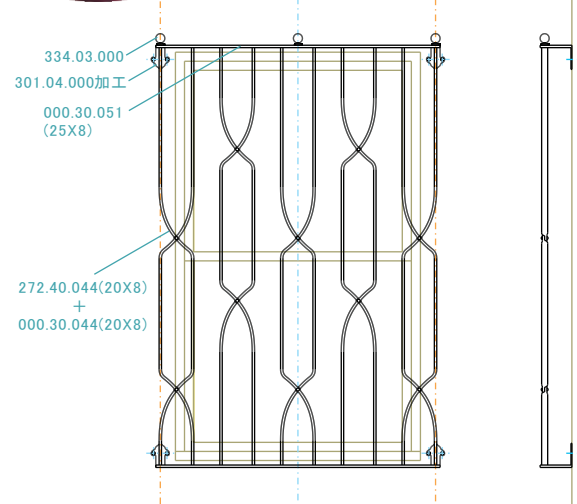
写真はロンドンの街角のものですが、
日本でも横浜赤煉瓦倉庫の未改修
部分の窓格子などにこの取付方法
を見ることが出来ます。



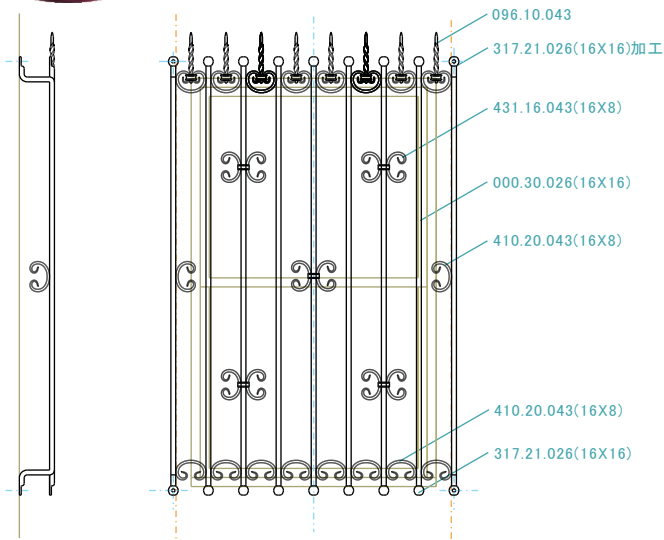
D215A



D215B



D215C



このページでは、ベースプレート専用パーツや、ローゼットをはじめ取付ベースプレートとして利用できそうなパーツを使用した例を提案いたします。

図D215A,B,Eでは、横棒を壁側に延長し、ベースプレートのパーツを付けた方式です。前ページの例に比べて取付部分と本体がより一体化して見えます。

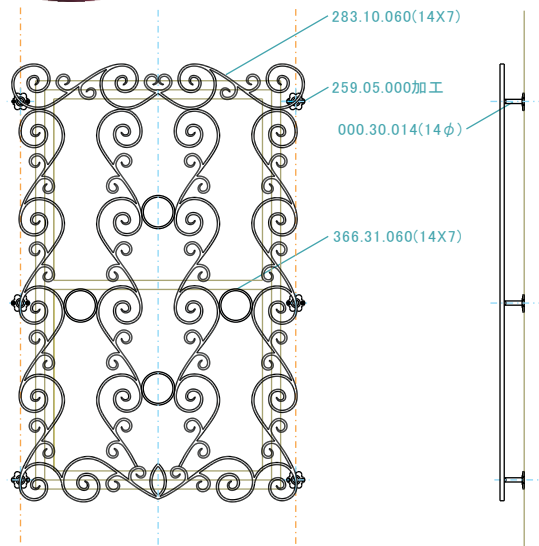
図D215Cは、両端のたて子を壁まで延長したスタイルです。ほかのたて子の上下端部と同じ剣先を曲げ加工、穴開け加工してベースプレート代わりにしています。より一体感が増しました。

図D215Dは、取付アームに丸棒、ベースプレートにローゼットを流用して、フラットバーで出来ている本体格子部分とあえて異なる要素を組合せました。

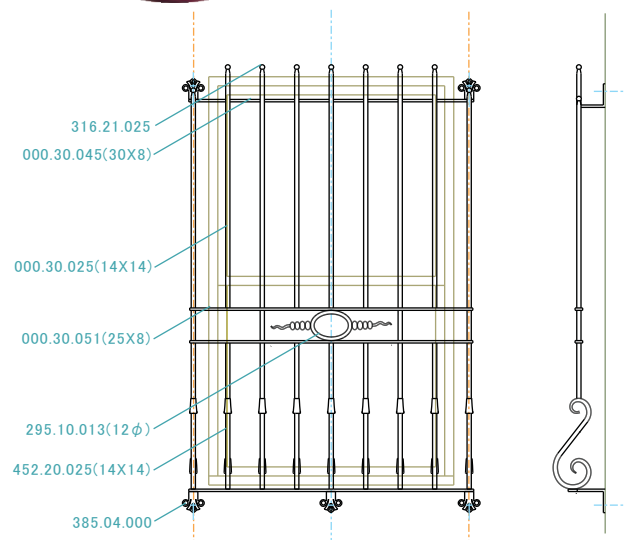
その他いまままでと異なる考え方として、図D215Dは主に283.10.060という長尺のモールを切断したり溶接したりして窓格子を構成してみました。

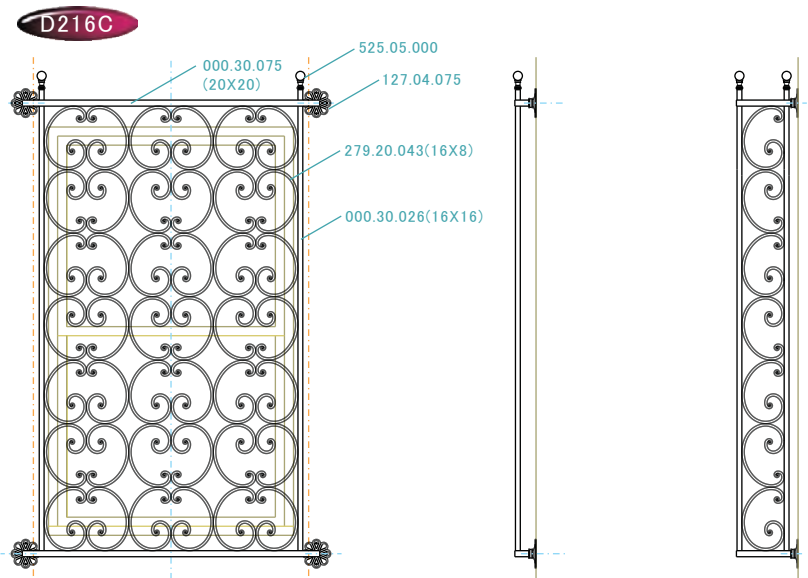
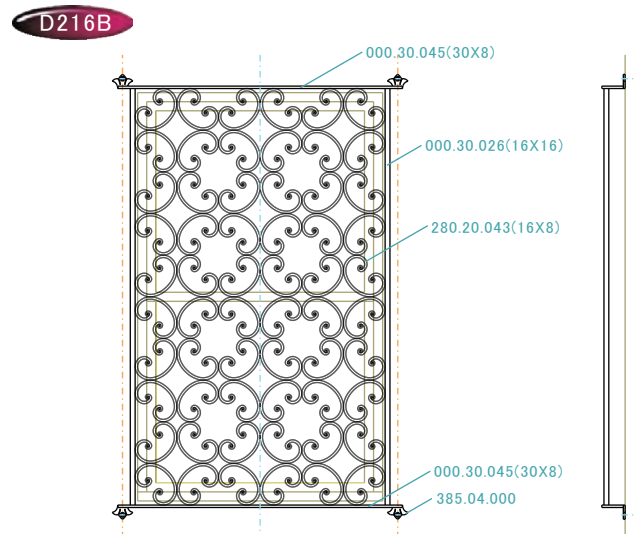
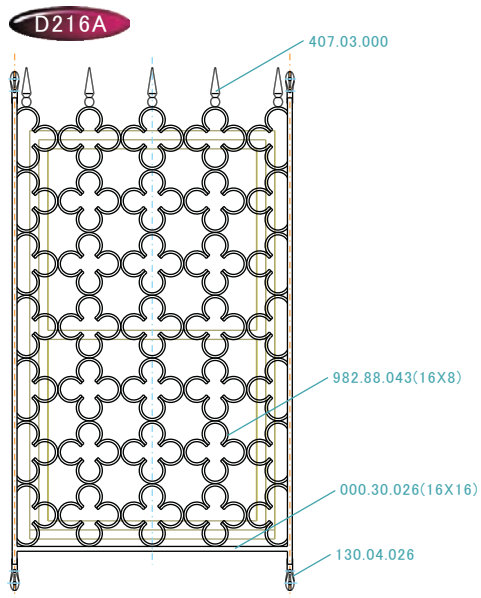
図D215Eは格子の下部にS唐草を見込方向に並べるデザインを提案しています。手前に膨らんだ感じが手軽に出せます。鉢を置けるといった実用的用途を持たせた提案はD217ページ等を参照してください。

D215D



D215E

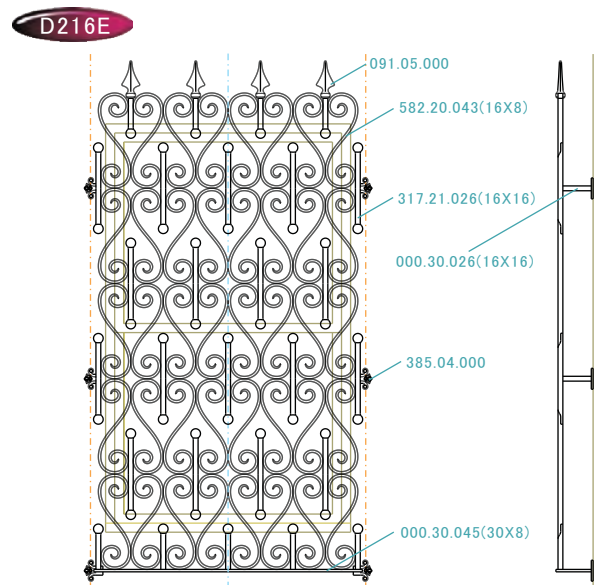
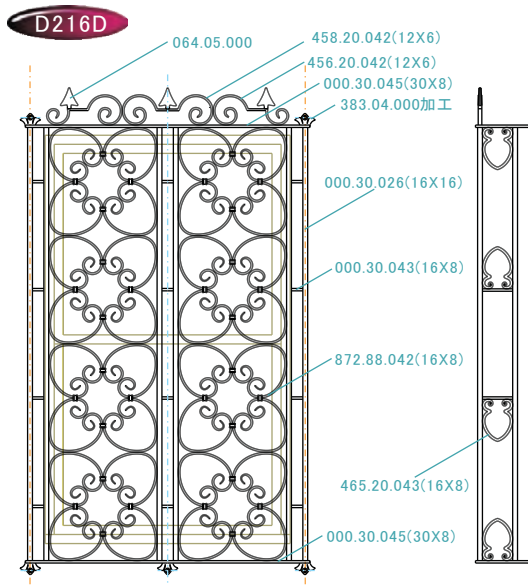




前ページまでは縦線を基本としたデザインを提案してきましたが、その他に、同じ唐草や唐草パネルを並べて格子状にすることができます。

この場合、唐草そのものの形よりも、連続したことによる思いがけない形が見えてきたり、唐草に囲まれた空白の形がインパクトを持つことも多くあります。

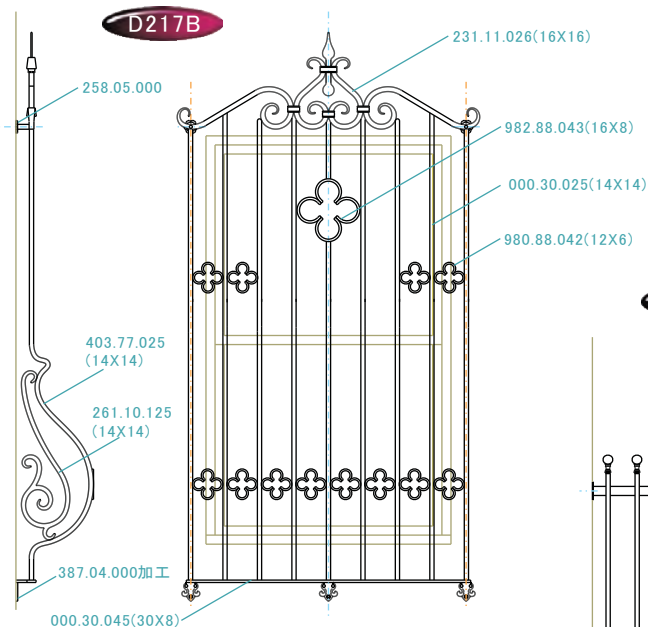
決まった寸法に治まらない場合は図D216Aの左右の処理のように一部を切り取って使用したり、図D216Dのようなデザイン処理をして寸法合わせをします。さらに図D216Cのいちばん右の側面図のように使って奥行を一体感を持ってデザインすることもできます。もう1列足せば、プランターボックスを置くスペースが生まれます。この場合は底をスノコ状にするとか、取付個所を増やして重量を受けられるようにする、あるいは上方からの侵入に備える策などを加えます。



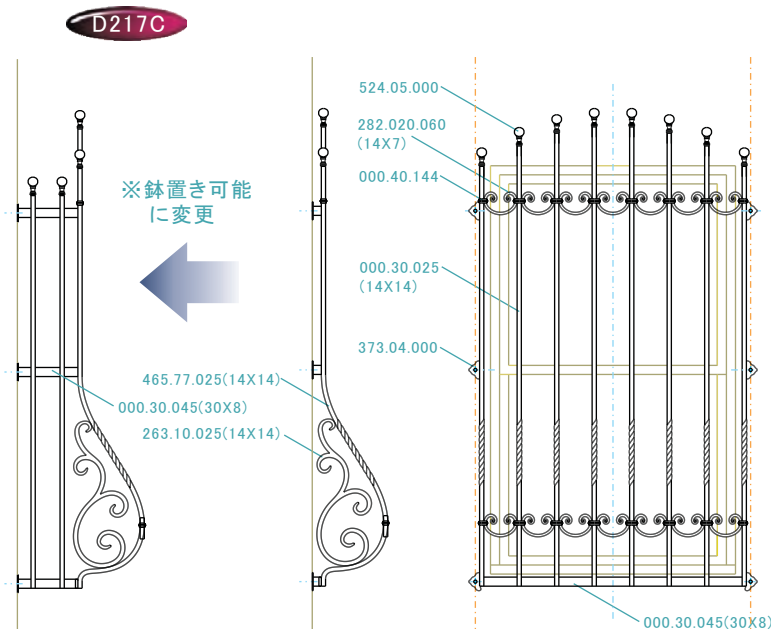
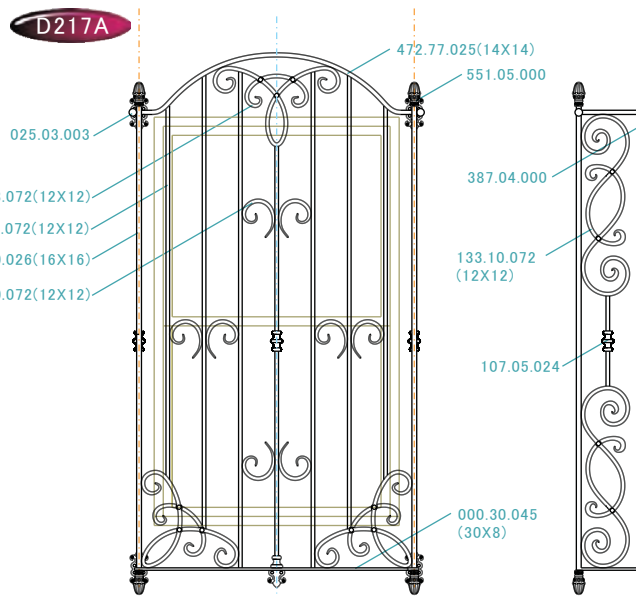
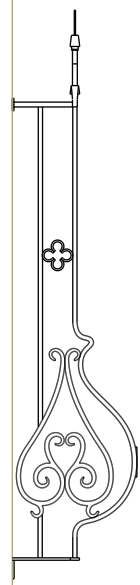
■ 鉢が置ける窓格子

図D217Aは、頂部をアーチ枠にしました。バルコニー用たて子の流用です。図ではわかりませんが、底をスノコ状にしたので小さい鉢を置くことができます。鉢の高さ分窓格子を下に伸ばして、室内から見た場合鉢が隠れて草花だけが見えます。水やりの際不意に室内にこぼれるのを防止する意味もあります。ちょっとしたことで取付後の使い勝手がよくなりますので、デザインする時点で寸法決めの根拠に活用できます。

図D217Bでは、アーチ上部用の唐草パネルを頂部に利用しました。下のほうはバルコニー用たて子を使ってふくらみを持たせたデザインです。ふくらみの両サイドはちょうど収まる専用の唐草パネルパーツがあるので、これを使いました。



※鉢置き可能に変更



鉢やプランターボックスを置けるようにするためには、窓格子の奥行が必要です。そのために、両サイドがガラあきになってしまいますので適当なパーツを補充しましょう。正面に使われているパーツを持ってくるとまとまりがよくなります。図D217B、D217Cの矢印の先にそのような例を示しました。



■ V&A博物館鉄工芸展示室



ロンドン屈指の展示スペースを誇るヴィクトリア&アルバート博物館(V&A)には建築関連のロートアイアンを中心に、鉄工芸を展示した一角があります。ヨーロッパのどの町でも見かける鉄工芸建築装飾のせいか、関心を持って観ている来場者は少なく、アジアやオーストラリアからの団バスツアー客は足早に



通り過ぎていってしまいます。イタリア、ドイツ、イギリスなど大体地域別に展示されていて、中世からごく最近までのものがほとんどです。館内レストランでは、イギリスの誇る工芸デザイナー・ウィリアム・モリスの壁紙の部屋で食事やお茶が楽しめます。

■ 窓手摺

窓手摺は室内からの落下防止柵の用途として用いられます。ですから基本的に普通の手摺やフェンスと同じです。ただ多くの場合、取付け方法が壁面取付となるため、窓格子と同じ取付方法を採用します。

デザイン的にも手摺、フェンスのデザインを修正するだけで窓手摺として使えるようになるので、そちらのページも参照してください。

手摺の高さは室内床からの高さをもとに決定します。床から窓下の高さが65から80cm位ある場合、**図D231A**のようにハンドレール主体の低い窓手摺も可能です。

図D231B以下はそれをベースにしたバリエーションです。

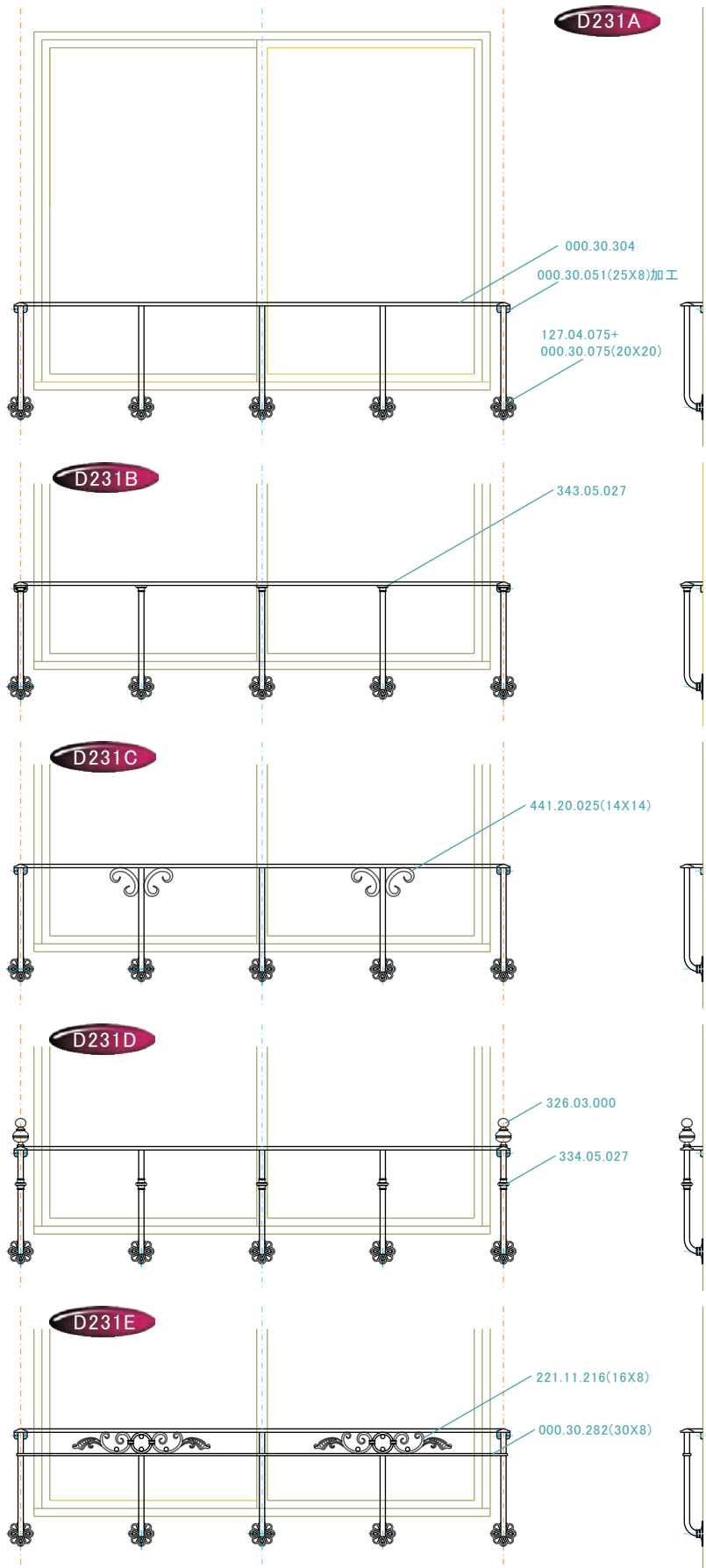
● 持出し用ブラケット例
127.04.075(20X20)

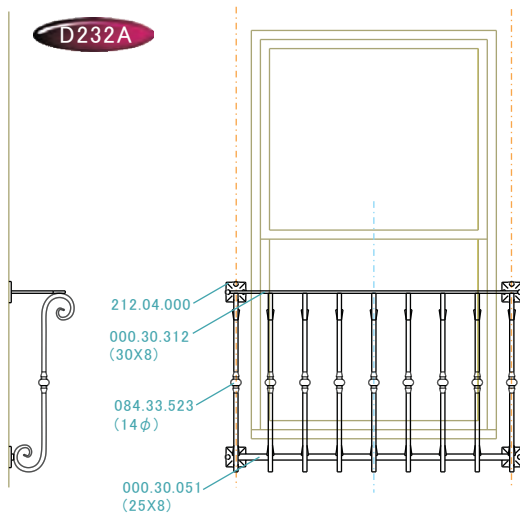


123.04.483(14X14)

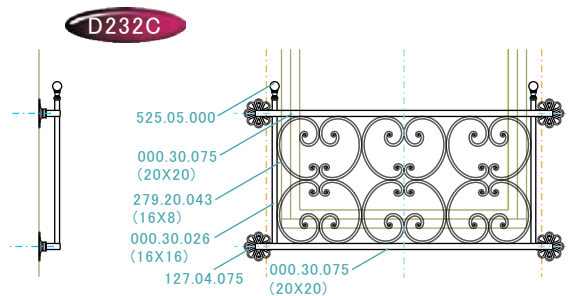
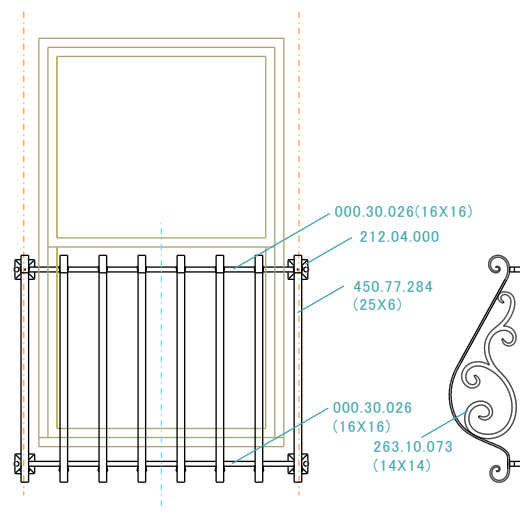


130.04.026(16X16)

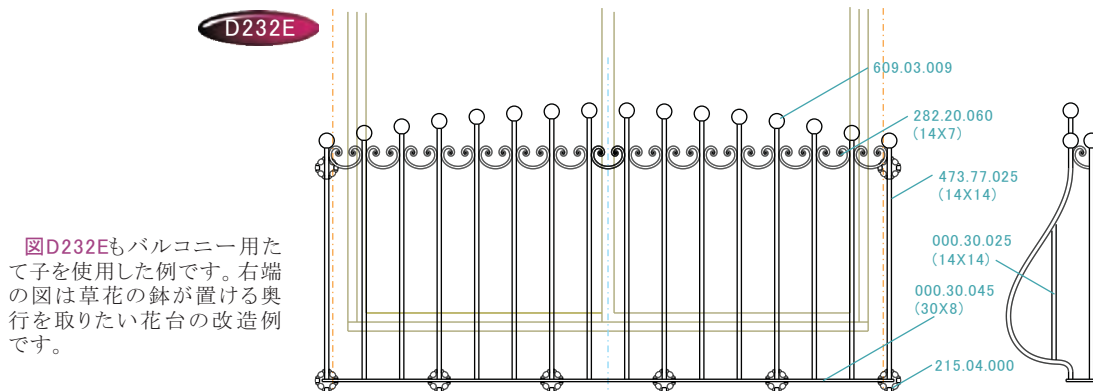
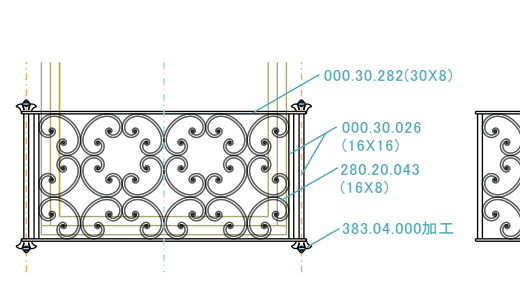




バルコニー用のたて子を使った例を☒
D232A,D232Bに示します。

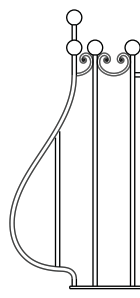


単体の唐草を連続させてハネル状にして使用する例を☒
D232C,D232Dに示します。

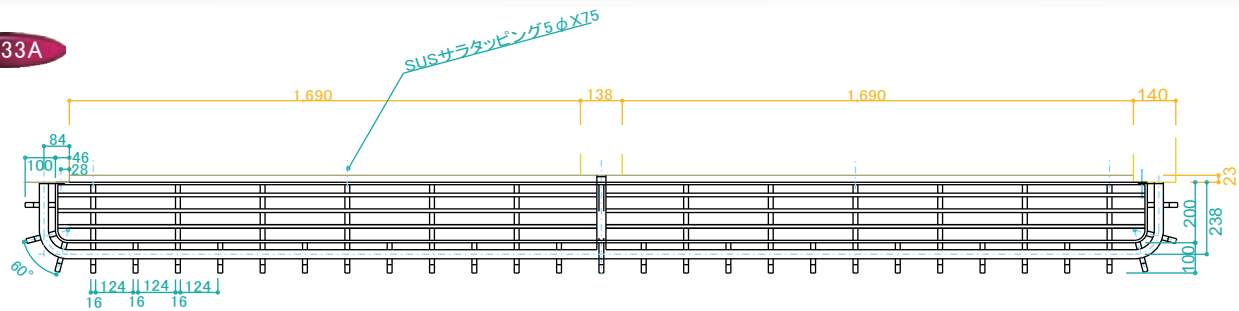


☒**D232E**もバルコニー用たて子を使用した例です。右端の☒は草花の鉢が置ける奥行を取りたい花台の改造例です。

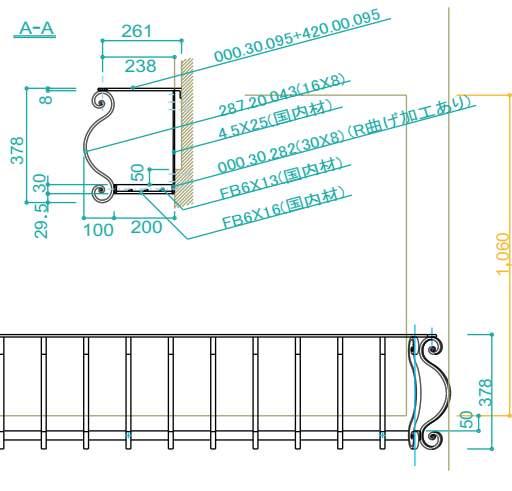
● 花台としても利用出来るタイプ



D233A

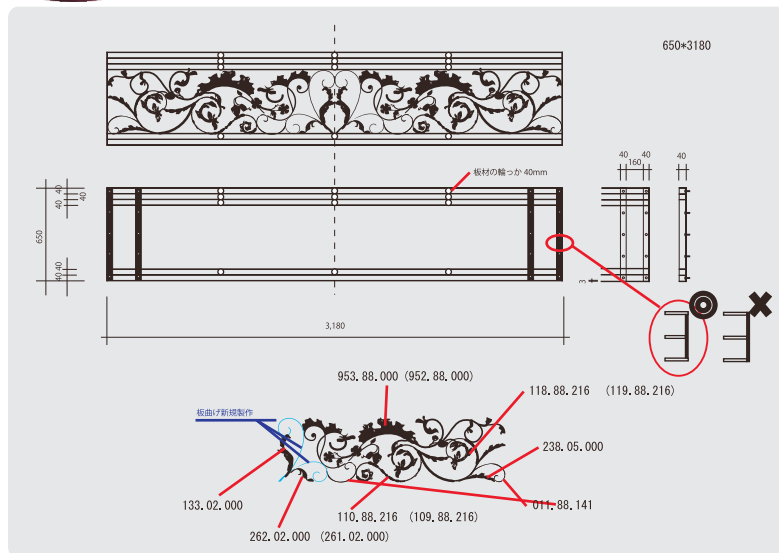


図D233Aでは上棧(ハンドレール)両端のコーナー部にハンドレールヤクモノの420.00.095を利用してRを持たせています。それに伴いたて子の唐草287.20.043も角度を付けながら曲がって行くデザインです。



図D233B,写真D233Cでは952.88.000,953.88.000を改造したり他のパーツを足したりしてまとめています。

D233B



D233C



D233D

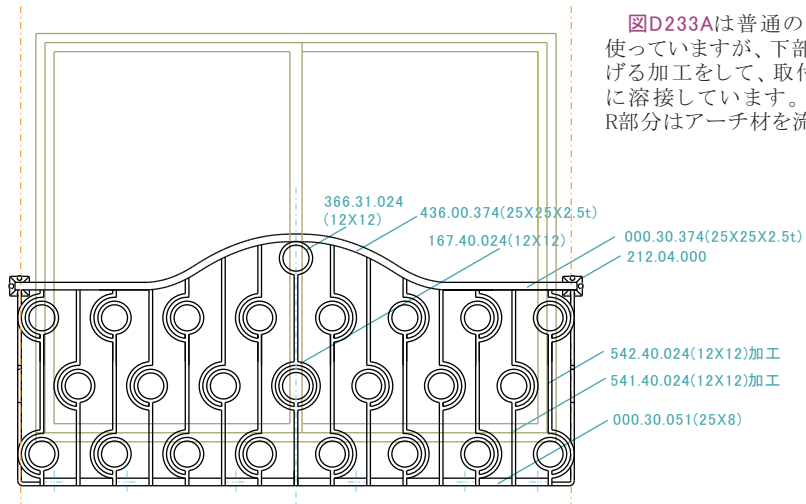
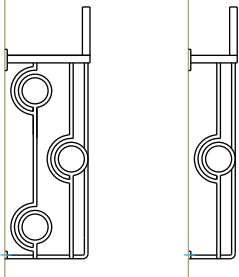


D233E



D234A

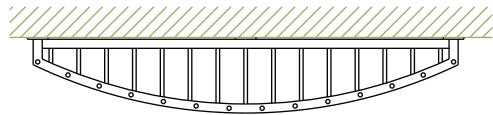
● 花台としても
利用出来るタイプ



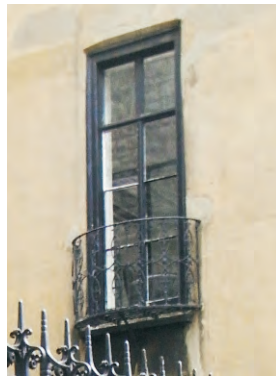
図D233Aは普通の手摺用たて子を使っていますが、下部を壁側に折り曲げる加工をして、取付用フラットバーに溶接しています。ハンドレールのR部分はアーチ材を流用しています。

図D234B,D234Dは、アーチ材を平面に倒して使用し、窓や壁に対して真ん中が飛び出している窓手摺です。草花の鉢を置ける上、垂直で平らな壁の窓部分に曲線の柔らかい変化が付きます。

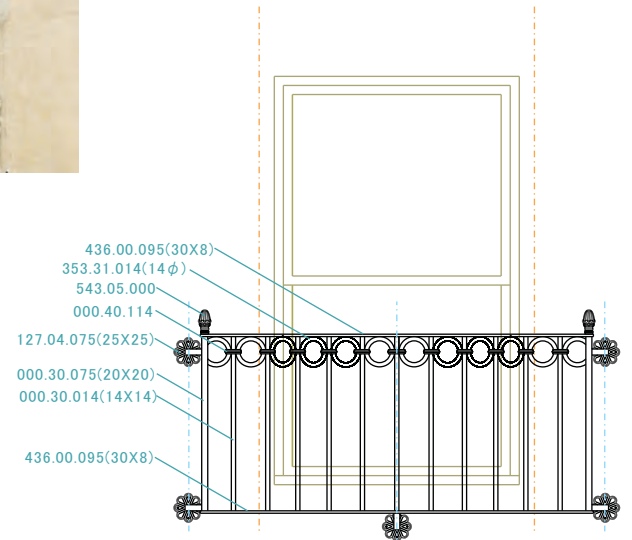
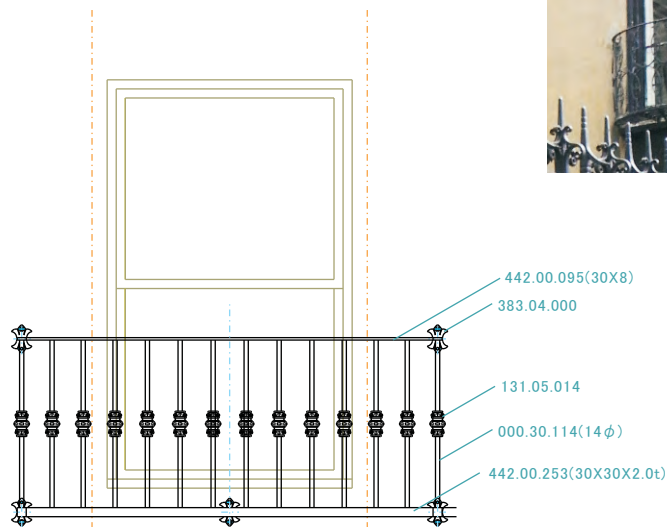
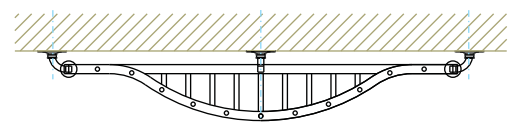
D234B



D234C



D234D



D234E



D234F

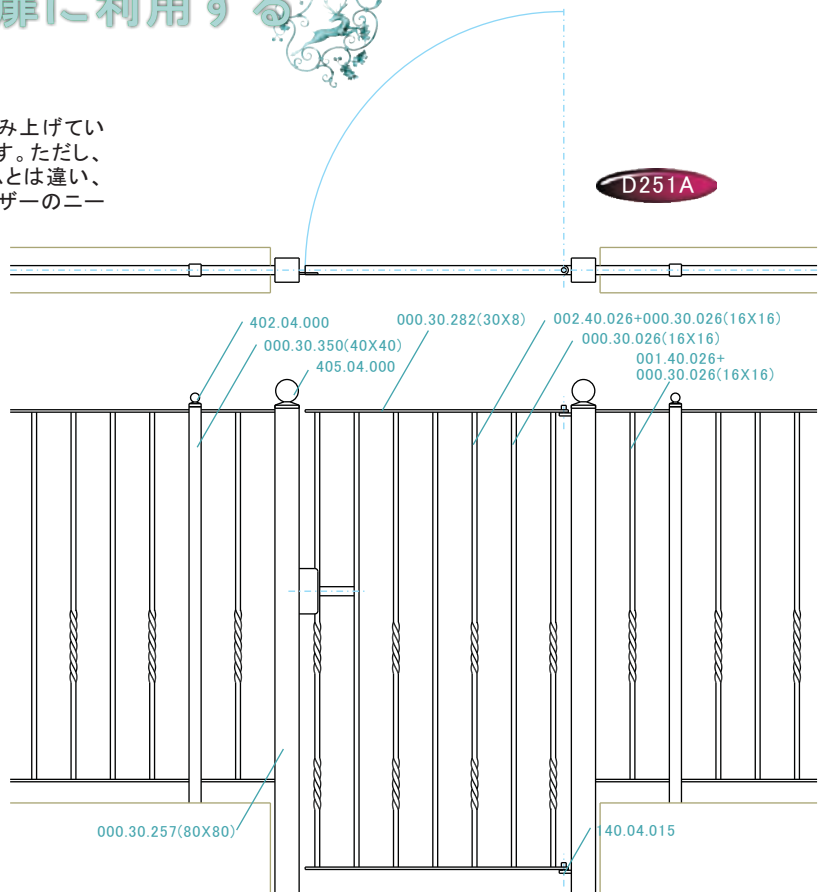


門扉に利用する

門扉も、手摺や窓格子と同様レッキーメタルのパーツを組み上げていくだけで手軽にロートアイアの雰囲気を作ることができます。ただし、今までの例のように一度固定してしまえばよかったアイテムとは違い、開閉や施錠解錠が日常的に行われることを考慮して、ユーザーのニーズに最も適したヒンジや錠、ハンドルなどを選択しなければなりませんし、取付方法や取付ける側の材質、強度も十分なものである必要があります。

一般的に日本で多く行われている、鉄パイプの支柱を地面に立ててそこに旗丁番で門扉を吊り込む取付方法の他にもいろいろな支持方法をヨーロッパなどのそこそこで観ることができます。特に軸吊り方式の丁番は重量のある扉に最も適した丁番として古くから使われています。

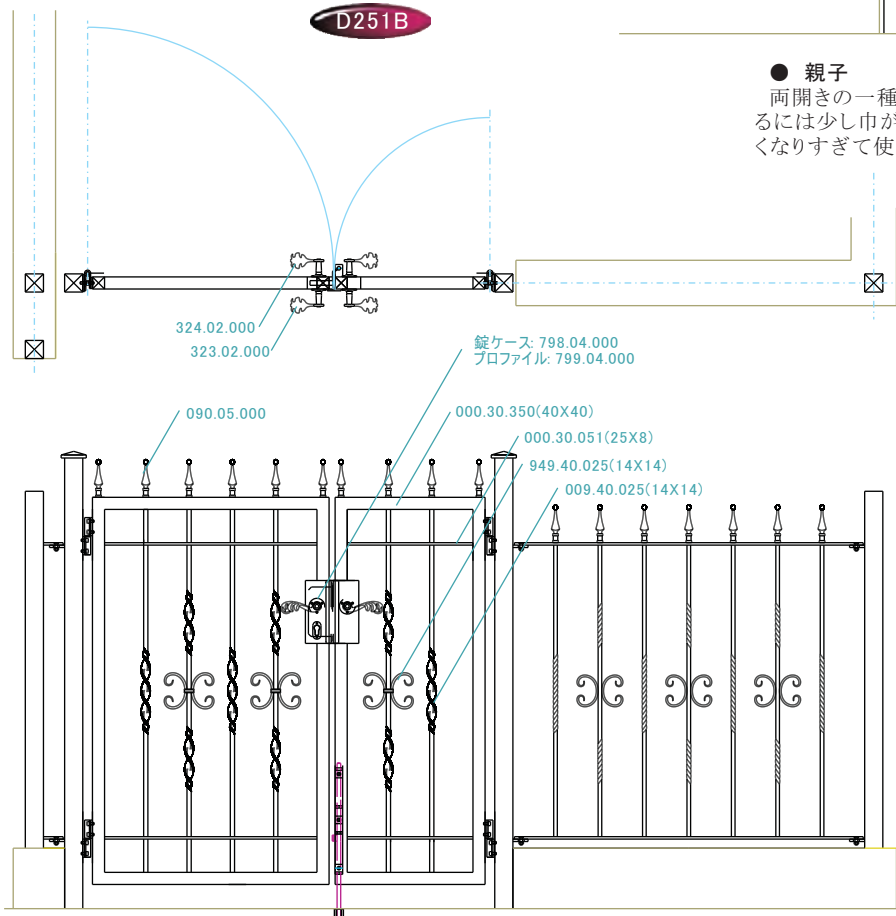
扉のデザインも、ロートアイア(鍛鉄)の特徴的な組立技法を理解すれば、単に四方枠の中に模様を入れるだけのデザインに捕らわれる必要はありません。



■ 開き方による種類

● 片開き

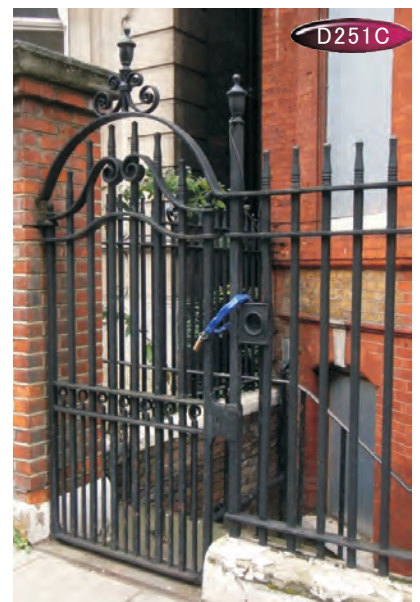
比較的幅の狭い門扉には、1枚の扉が開閉するだけの「片開き」がよく使われます(図D251A、写真D251C)。



● 親子

両開きの一種で、左右の扉巾が異なるものを言います。片開きにするには少し巾がありすぎるが、左右対称の両開きにするには1枚が狭くなりすぎて使い勝手が悪いとき、よく利用されます。図D251Bでは右側が普段開閉に使われ、左扉は普段落し棒で固定されています。

駐車場などの開口の広い親子扉では、車の出入りに使う巾の広い扉のほうを普段固定し、狭い扉を普段の人の出入りに使ったりします。





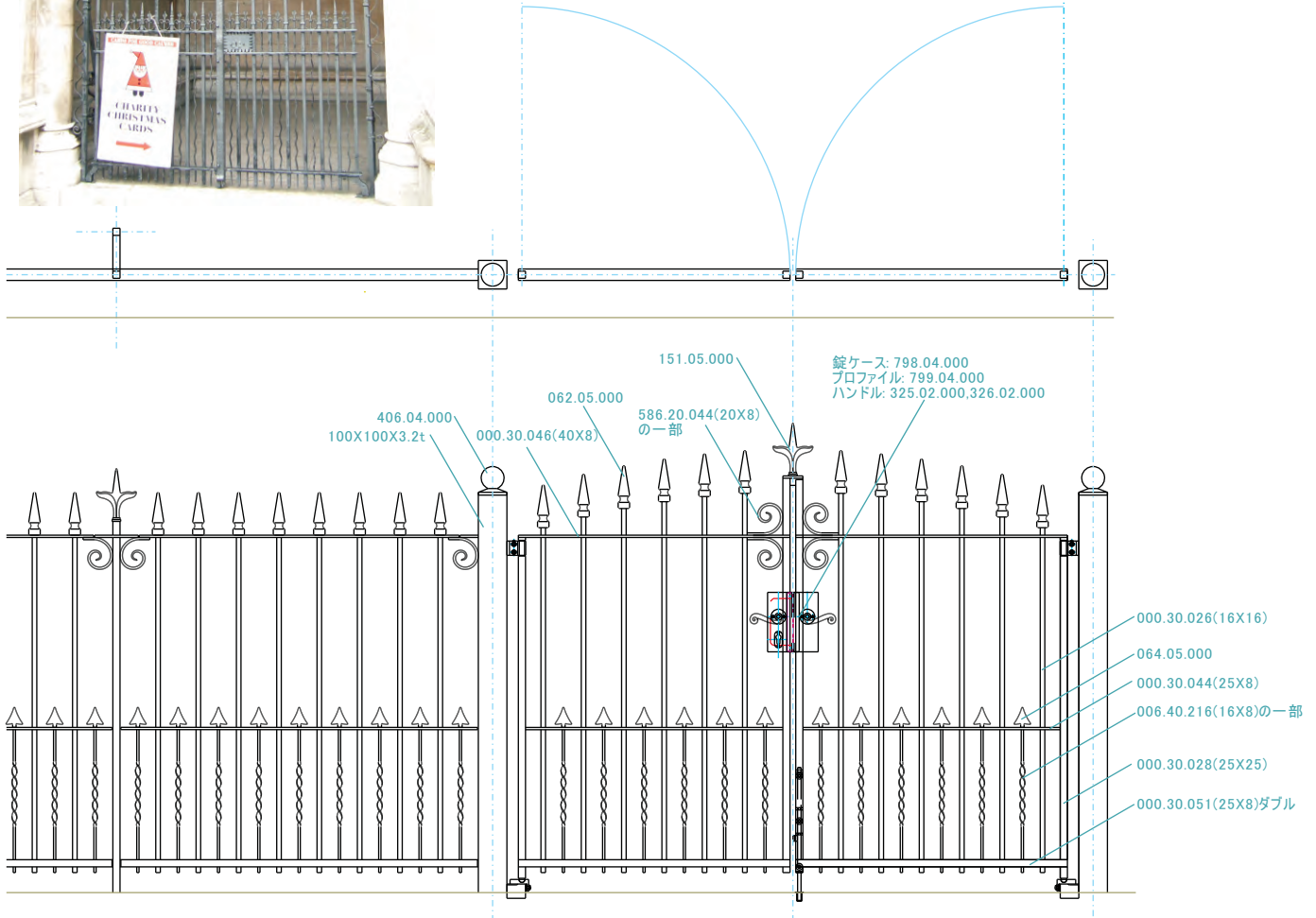
D252A

● 両開き

左右対称の2枚の扉が開閉する門扉で、最もポピュラーなタイプです。閉まった時、中央で両方の扉がぴったり合うように製作施工するのが理想です(図D252B)。

大型なもの、巾のあるものでは、床面にレールを設けて、上を扉に取り付けた車輪が転がる構造にしたりしますが、施工精度が一層要求されます。開け放しの状態で使用する機会の多い場合は、不用意に動かないよう、開いた時のポジションでの固定方法も重要な要素です。

D252B



D252C



大型の両開き門扉では、支柱(門柱)を写真D252Cのような断面の大きなものにしたたり、上部にアーチで橋渡しをして強い構造にした中に扉を吊り込むことも多くあります。

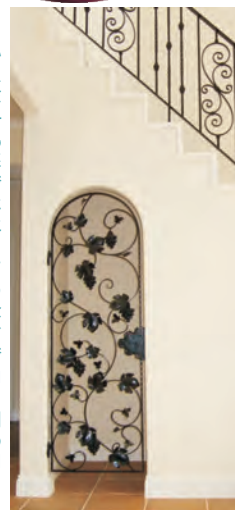


■ 建物内部の扉

ロートアイアの格子扉というと、外部の門扉を一番に思いつかれる方が多いと思います。ロートアイアンの本場ヨーロッパ各地では建物内部にも普通にロートアイアン製の扉が付いていて、今まで室内で鉄を使うことの少なかった日本でもだんだん目につくようになってきました。

写真D252Dは住宅の階段下スペースを利用した収納庫の扉です。密閉する必要の少ない場所や通路などでロートアイアの扉が利用できる例です。一方写真D252Eはビル内に店出している店舗のもので、風雨を避ける必要もなく、空調もフロア共通なので、このように密閉性のない格子戸が採用されています。

D252D



D252E

